

初等社会科におけるカリキュラムの連動と物語評価の実践 ー5年「これからの農業を考えようー「働く」で大切なことー」を事例にー

野元 祥太郎

1 問題の所在ーカリキュラムの連動と物語評価の実践

本校では、教科等のカリキュラム連動を通してより一体的に〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成を目指している。これまで本校社会科部では、子どもたちが出会い向き合う概念について、問い直したり、崩したり、再構築したりする学習過程を取り入れることが社会科こそが果たすべき役割だと考え、取り組んできた。このような社会科の役割が十分に果たされたとき、コンテンツで結ばれた学びが停滞することなく、さらに異質で解のない考えや問題に向かう、そして自分の認識の変化・更新を肯定的に受容しようとする姿につながると考えている。

また、子どもたちの育ちを見取る手段としてヒロガル・シートの取り組みを進めている。本稿では、第5学年の単元を事例に以上のような実践について分析を試みた。

2 単元デザイン

(1) 産業学習における「働くこと（職業・労働）」を取り上げる意義

現代社会は、働く意味が問われる時代と言われる（杉村,2014）。「勤勉」という価値観から「自己実現」としての働く意味も大切にされている。社会科は市民性形成を主たる目的とする。市民として生きることに伴う「働くこと（職業・労働）」について考えることは、社会科が果たすべき役割の一つだと考える。

大澤（2008）は、表1のように「仕事に見る4つの側面」を整理し、これまで特に②のタイプの「働くこと（労働・職業）」を取り上げる小学校社会科学習が少なかったことを指摘する。その上で、職業と労働がもつ個人的側面と産業的・社会的

表1 仕事に見る4つの側面
(大澤（2018）をもとに筆者作成)

	労働	職業
個人的側面 ＜私＞	①生きるために自らの精神的・肉体的能力を使って、財やサービスの生産に携わること。	②様々な思いを抱きながら継続的に個々の職務（役割と責任）を果たし報酬を得るもの。
産業的社会的側面 ＜公＞	③特定の環境や条件の下で、種々の連携により産業や社会を維持・発展させる財やサービスの生産を行うこと。	④多種多様な分業によって産業という営みを支え、社会を成り立たせるもの。

側面をバランスよく統合的に取り上げることが提起している。第5学年においては産業学習で多くの働き手と出合う。その中で子どもが「働くこと（職業・労働）」についての考えが深まることを目指したい。

（2）農業学習における担い手不足問題，その対応としての「農福連携」

農業分野において，近年労働力確保が困難になったり，耕作放棄地が増加したりすることが課題となっている。これに対して近年注目されているのが「農福連携」という取り組みである。農業分野における労働力確保と福祉分野における障害者等の働く場の確保，賃金・工賃の向上等，双方の課題を解決し様々な効果を期待するものとして活発になっている。農福連携は，福祉が農業生産に取り組んだり，農家が障害者等を雇用したり，企業が障害者等を雇用し農業に取り組んだり（特例子会社等）するなど多様な形態がある。注目すべきは，これらの取り組みが職業・労働のあり方や産業・社会・消費者の結びつきのあり方を問い直す実践でもあるということである。例えば，本単元において協力をいただいたアソシエイトファーム（東広島市）は，農場におけるモバイルトイレの導入についての研究を進めている。農業においてトイレの整備が不十分なことは，障害者はもちろん，若者，女性の就労を阻害する要因として注目されている。障がいがある人が働きやすい職場環境を作ることは，多様な人々が働きやすく場になり，働き手が増えることにもつながると考えられている。また，同様に協力をいただいた八天堂ファーム（三原市）は，ノウフク JAS を取得し，様々な農福連携商品を開発している。よい商品をつくり経済的価値を磨き持続させることで社会的価値を高める，そして農福連携という仕組みを社会システムの中に根付かせようとしている。八天堂ファームの実践からは，産業の担い手不足は，その産業がきちんと経済的な循環の上に根付かないと解消は簡単ではないことが示唆される。以上のように，担い手不足問題を始まりに障がいがある人の雇用を考えることで，働くこと（職業・労働）のあり方について深く考えることにつながると考えた。



図1 出前授業（アソシエイトファーム）



図2 出前授業（八天堂ファーム）

(3) 単元の目標ならびに単元計画

本単元の目標

- 我が国の食料生産について、地図帳や各種資料で調べ、適切にまとめ、我が国の農業は、自然条件を生かして営まれていること、生産に関わる人々が、生産性や品質を高めるよう工夫・努力をしていることなどを理解できる。また、我が国の食料生産は、国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや、これからの食料生産について、重大な課題があることを理解できる。【知識及び技能】
- 農産物の生産の分布や生産量、作業工程、技術の向上、人々の協力関係などに着目して、農産物の生産の概要と生産に関わる人々の工夫や努力をとらえるとともに、農産物の生産やそれらに関わる人々が国民生活に果たす役割について考え、調べたことや考えたことを表現できる。また食料生産や食料輸入、生産量や働く人の変化などの概要をとらえ、食料生産が国民生活に果たす役割を考えるとともに、持続可能な取り組み、6次産業化、地産地消、技術の向上、人材確保などの、食料生産に関わる人々の工夫や努力をとらえ、考えたことを適切に表現できる。【思考力・判断力・表現力等】
- 農産物の生産の概要や生産に関わる人々の工夫、努力などについて、学習問題を意欲的に追究するとともに、これまでの学習を振り返り、自分の考えを深めたり、広げたりしている。また、これからの我が国の食料生産のあり方について、様々な立場から多角的に考えている。【主体的に学習に取り組む態度】

単元計画

第1次	我が国の農業と抱える問題点・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4
第2次	これまでの農業（米づくりに取り組む人々）・・・・・・・・・・	6
第3次	これからの農業（農福連携に取り組む人々）・・・・・・・・・・	5（本時 5/5）
第4次	農業、「働くこと」の未来とわたしたち・・・・・・・・・・	3

(4) カリキュラムの連動と子どもの実態について

本学級の児童は、今まさに自分の将来の描き方について考えさせられる時期にある。具体的には進学をどのように考えるかという問題ではあるが、学級指導の場面では繰り返し「どんな自分でありたいのか」を思い描くことを求めている。ここには自分が将来取り組んでみたい仕事・職業の話題も含まれてくる。社会科は、社会を構成する様々な人々がどのように社会に関わっているのかに出合うことができる教科である。児童が自分の生き方をも考えることを促すことに本単元が寄与することをねらいたい。なお、本単元は社会科カリキュラム上の「社会・経済」領域として設定する。これまで児童は5年「運輸・物流におけるデジタル技術の導入」においても運輸・物流業界のドライバーの働き方に着目して考えることに取り組んだ。また、本単元は「働くこと」の自分・社会にとっての意味を問うということを中核に据えて他教科等との連動を図る。総合的な学習の時間や道徳科「カメラマンの選択」など同様に勤労が主題となる教材にも出合わせながら、社会科においては具体的な社会問題を通して「働くこと」を問い直す契機にしたい。

3 検証授業における子どもの見取り

(1) 本時までの学習過程

本時に至るまで子どもは、まず、第一次において単元の学習問題「どうすれば農業の担い手不足を解決できるか―「働く」で大切なことを考えよう」を設定した。次に第二次においては、実際に農業で働く人たちにとっての「働こう（就農）」「働き続けよう（継続）」を支えているものは何か、南魚沼市の米農家を取り上げて学習をした。

そして第三次は、農業の担い手不足に対する一つの対応策として行われている「農福連携」を取り上げた。学習にあたっては、まず農福連携の施策の全体像についてアソシエイトファーム・石村氏からお話をいただいた。また、農福連携の先進的な実践例として静岡県浜松市の京丸園の取り組みを取り上げた。京丸園では「ユニバーサル農業」を提唱し、誰もが働きやすい、能力を発揮できるような農業を目指して、様々な工夫を取り入れながら発展し、収益も伸ばしてきた。なお学習にあたっては絵本『めねぎ農園のガガガガン』を使用した。実際の取り組みが子どもにも分かりやすいイラストで描かれているため、子どもの理解が深まった。

(2) 本時の学習過程

本時は、先の京丸園のような農福連携の取り組みと似て非なる取り組みである農園型「障がい者雇用代行ビジネス（以下、貸農園ビジネス）」を取り上げる。貸農園ビジネスとは、企業が障がい者雇用率達成のために農園をレンタルし、そこで障害者を雇用するビジネスモデルのことを言う。障がい者にとっては高い賃金や工賃を得られたり、雇用主である企業にとっては雇用率を達成できたりするなど、双方により良い形を生み出す事例もあるが、問題点が多いことも実態である。例えば、休憩時間がほとんどで働く意義が十分に見出だされない労働実態が多くあったと言われている。また、障がい特性に応じた労働環境は十分に確保されていない実態もあったとされている。本時は、前時までに貸農園ビジネスとそれを巡る論点について、資料をもとに確かめ



図3 本時の板書

た上で、貸農園ビジネスの是非について「働くこと（労働・職業）の意義」と照らし合わせながら議論することを主な学習活動とした。

なお、議論するにあたっては「テイク・ア・スタンド」という方法を用いた。自分の考え・立場を、教室での物理的な立ち位置で示しながら考えを交流するものである。また、議論を整理するにあたっては尾高（1941）が示した「職業の三要素」、すなわち「生計維持（経済的側面）」「個性の発揮（個人的側面）」「社会的連帯の実現（社会的側面）」に依拠した。これらを基にしながら、貸農園ビジネスで実現されている要素、疎外されている要素は何かを明確にして議論を進めていった。

本時の目標		
農業の担い手不足問題に対して、働くこと（職業・労働）の意味を多角的に検討して考え、自分の意見を批判的・省察的に形成することができる。		
学習活動	指導の意図と手だて	評価の観点と方法
1 前時までの学習を確認める。	○農園型障害者雇用代行ビジネスも農業の担い手不足に寄与する可能性があることを確かめる。	●労働の意味を多角的に検討して考え、自分の意見を省察的に形成することができる。（OPPシート）
貸農園ビジネスは、農業で「働こう」「働き続けよう」につながると言えるか。		
2 働くこと（労働・職業）の意味、農福連携との違いに着目しながら、課題について話合う。	○前時までの事例（米づくり農家、農福連携の取組等）を取り上げ、労働それ自体や関わる工夫・努力などを再度意味づけられるようにする。	
3 単元の学習問題について、働くこと（労働・職業）の意味や労働社会のあり方に着目して再度考え、話し合う。	○単元の学習問題について再度議論することを促し、批判的・省察的に自分の意見を形成できるようにする。	

4 物語評価を用いた本実践の見取り

本稿では、〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育ちを見取る方法としてヒロガル・シートを活用している。南浦（2021）も述べるように、これまでの社会科では振り返りシートで社会的事象・問題についての客観的・説明的な記述（例：「ーがわかりました」）が多かったことに対して、自分の視点から一人称的な視点で記述する「学習経験の一人称的物語的描写」のような振り返りシートが必要だと考える。その子（自分）自身の認識やその変容を可視化することができるようなシートへの改良に向けて試行錯誤している段階である。以下、複数名の子どもヒロガル・シートを取り上げる。

A児	私にとっての他者は働くです。働くことについて、少しいこうがありました。働くことは、農業だけの話じゃないし、働くことへの思いもそれぞれの職業でちがいます。<u>人手ぶそくも農業だけではなく、他の事もそうかもしれない。</u>人手ぶそくをかいけつする人たちも、決めつけをされ社会の格差を味わって苦しんだ人かもしれない。働くことの良いところ、悪いところを教えてくださいそんなじゅぎょうであり、働くことへのていこうをすこしへらしたじゅぎょうで、働くことへのかべをなくすためにはどうするのかを考えられたものでした。<u>大人になるまでにこんな働き方になればいいなとも思ったし、なっていなかったら理想に似た現実になるよう行動を起こしたいです。</u>
B児	農業はもともと知っていたが、今、農福連けいの形をとり、担い手不足の解消に努めているとは知らなかった。農福連けいとは、障害者の人などと農業が win win になるような関係。それをめざすために、京丸園の鈴木社長は「仕事に人を合わせるのではなく、人に仕事を合わせるのだ」と考えていた。そうすることで、働き続けようと思う人たちがふえていったのだと思う。<u>これを学校でつかうと、相手が良い気持ちになり、おたがい win win になると思う。</u>
C児	農業の人手不足の課題に出会うことで、「こうしたら人手が増えるんじゃないか」「いや、でもそれだと減る可能性もある」という感じで相手の意見も知りながら、自分の意見とも共有し、<u>幅広くよく考え、農福連けいについても、よく知ることができた。</u>働くで大切なのは、相手の気持ちを考え、その相手の気持ちによりそのような職場づくりだと思う。障がい者でも、だれでも働けるようなルールなどを作った方がわかりやすくなると思うし、<u>農業の人手不足もトラックの運転手も解決できるかも？</u>

特に農福連携についての記述があるものを抽出した。これらから見出させたことは、大きく3点ある。第1に、子どもが自分の生活や生き方と結び付けながら考えようとする姿が見えることである。例えばA児は自分のこれまでの労働観と結び付けたり、今後の自分の働き方をイメージし始めようとしていたりしている。またB児も、農福連携やそこから学べる「働くこと」の意味を参考に、学校での学級・仲間関係に生かすことをイメージしている。第2に、子どもがこれまでの別の学習と結び付けて考えようとする姿である。とりわけC児は以前の5年「物流 2024 年問題」におけるトラックドライバー不足とも関係付けながら考えをまとめようとしている。第3に、子どもが自分の学習のプロセスを描こうとしている点である。例えばA児は初めの自分が感じていた「働くこと」への抵抗感をシートでは描き出している。またC児は、教室の友達との議論を経て変容したり考えを深めたりする自分のプロセスを描こうとしている。

以上のように、ヒロガル・シートからはこれまでの振り返りシートではあまり見られなかった自分の視点で社会的事象・社会問題について振り返ろうとする姿が多く見られる。当事者性を重視する社会科においてこそ、学習における「わたし」をしっかりと位置付けていくことが重要である。引続きシートの改善、授業改善に努めたい。

<引用参考文献>

- 大澤克美（2008）「仕事認識の育成をめざす小学校産業学習の検討－工業学習を事例として」日本社会科教育学会『社会科教育研究』102,1-15.
尾高邦雄（1941）『職業社会学』岩波書店
杉村芳美（2014）「成熟社会で〈働く〉こと」猪木武徳編『〈働く〉はこれから－成熟社会の労働を考える』岩波書店
南浦涼介（2021）「社会科における『主体的に学習に取り組む態度』の評価法について述べなさい」唐木清志・永田忠道編著『新・教職課程演習』協同出版，11,97-99.